

大内秀明『ウィリアム・モリスのマルクス主義—アーツ&クラフツ運動を支えた思想』(2012、平凡社新書)を読む I 報告者：半田 正樹

序章

モリスは社会主義者であり、それも『資本論』のマルクス主義者である。(p.10) (cf.p.87)

👉(論点①)モリスは「マルクス主義者」である、をどう受け止めるか。

第二次大戦後の冷戦下における「社会主義」

日本では、マルクス・レーニン主義が「社会主義」

西欧では、社会民主主義が「社会主義」(英国におけるフェビアン協会、イギリス労働党など)

冷戦終焉後

ソ連の崩壊によるグローバル化のさらなる進行は、新興諸国の発展とも重なり、国際競争の激化により、西欧の社会民主主義(「大きな政府」=「財政膨張」に基づく福祉国家)の維持を困難にした。

↓

ソ連崩壊と社会民主主義の限界露呈は、社会主義の終焉を意味するのか？

ここにモリスのめざした社会主義の意味がある



『資本論』の科学を踏まえ、友愛と連帯と協同をもとにしたコミュニティ社会主義=共同体社会主義。しかも生活を豊かにする芸術をとりこむ芸術社会主義の側面ももつ。

第1章 モリスとアーツ&クラフツ運動

モリスに宿った社会主義のイメージ

⇒「世界で一番美しい村」コッツウォルズの豊かな自然と村人たちの安らぎの暮らし(いわば現代のスローライフ)が根底。そのイメージとつながっているのが、コッツウォルズ地方にあるケルムスコット村の田園に根ざした思想とデザイン感覚。

また、モリスの芸術に対するとらえ方に加えて、社会思想とりわけ労働の考え方を決定づけたのが美術評論家のジョン・ラスキンだった。

アーツ&クラフツ運動

⇒産業革命後の大量生産による製品の「画一性・非芸術性」を批判的にとらえ、中世のギルド的職人の手工芸品(crafts)の見直しを追求した試み。モリスは、大量生産に抗し、生活空間の美化をはかるために、あらゆる部門の連携を求めた。

cf.この運動は、大陸においてはフランスのアール・ヌーヴォーや20世紀ドイツのバウハウス（洗練されたモダン、とでもいうべき運動）の流れを生み出した。ファインアートとデザインないし応用美術への分岐（報告者による註解）

👉(論点②) 産業革命後の機械制大工業による量産品をどう位置づけるか。

* 「生活に役に立たないもの、美しいと思わないものを、家に置いてはならない」(モリス)をいかに「評価」するか？

◇「近代文明の大量生産—大量消費のライフスタイル、さらにワークスタイルに対して、モリスは100年以上も前に厳しい警告を発していたのです。目先だけの利便性や快適性、安価なショッピングの誘惑の裏に、破滅の危険が潜んでいる。それを見抜くためには、芸術の価値を正しく認識する」(p.26)

□モリス商会：教会のステンドグラス制作、サウス・ケンジントン博物館のグリーン・ダイニングルームの室内装飾などを手掛けた。グリーン・ダイニングルームは、ミュージアム・レストランであり、料理も生活芸術ととらえるモリスの思想が反映されていた。

モリスの芸術思想

モリスの芸術思想＝商業主義・市場主義や唯美主義・芸術至上主義とは区別される〈生活芸術〉と呼び得る考えであり、モリス自身の言い方では小芸術(Lesser Art)。〈小芸術〉は、生産と消費が一体化し、生活に結びついた、生活のための芸術であり、そのイメージは「世界で一番美しい村」の農民芸術といえる。

👉(論点③)モリスは、アーツ&クラフツ運動や小芸術、生活芸術の思想から「芸術に携わる人々の生産と労働」を思考の対象にした(p.33)、とあるが、「芸術に携わる人々の生産と労働」というよりも、「労働」そのものについて考究を重ねたのではないだろうか？

モリスの労働観



たとえば、A. スミスの労働観は、「骨折りと苦勞」(toil and trouble)であるが、それは市場経済の個人主義＝利己主義に基づいた商業主義のイデオロギーであったが、モリスの労働観は、「喜びと楽しみ」(joy and pleasure)であった。

⇒その集大成的フレーズが「芸術は労働における人間の喜びの表現」(ART IS MAN'S EXPRESSION OF HIS JOY IN LABOUR)であり、これをモチーフに、宮澤賢治は、「芸術をもてあの灰色の労働を燃やせ」と表出した。

ちなみに、モリスの労働観は、マルクスの『資本論』から学んだものであった。すなわ

ち、市場原理の商業主義に流された労働観から自由になって得た労働観といえる。

第2章 モリスとマルクス、エンゲルス

モリスとマルクス (p.50)

1881年に発足したハイドマンが指導する「民主連盟（後の社会民主連盟）」に、モリスが加盟。マルクス主義に接し、『資本論』（生前のマルクスが直接手を入れた、ロワ版フランス語訳）を手にする ⇒ 熟読。案内役は、エリノア・マルクスとの関係で知遇を得た E.B. バックス。注目すべき点は、モリスが読んだ『資本論』は、周期的恐慌による純粋資本主義の自律した運動法則の解明を意図していたこと。

モリスとパリ・コンミュン

マルクスのパリ・コミューンの評価 (p.64)

◇本質的に労働者階級の政府であり、横領者階級に対する生産者階級の闘争の所産であり、労働者の経済的解放を成し遂げるための、遂に発見された政治形態。

エンゲルスのパリ・コンミュンの評価（後にレーニンがこれを継承）(p.66)

◇軍事面からとらえつつ、中央集権化による統制組織として位置づけ、いわゆる「プロレタリア独裁」のモデルと見た。

モリスのパリ・コミューン理解 (pp.72-73)

◎〈共同体社会主義〉の実践であり、社会主義の新しい道徳（労働や生活に芸術をとり戻すことが労働者の解放であり、社会主義の実践にほかならない）によって表現された。

モリスと共同体

◎晩期マルクスは、モルガンの『古代社会』に丹念にあたりながら『古代社会ノート』を残したが（他方で、エンゲルスは『家族、私有財産、および国家の起源』を著したが）、モリスは、こうした動きを見つつ、バックスのアドバイスもあって、資本主義に先行する共同体についての検討を深めた (pp.77-79)。

↓

1893年に刊行されたモリスとバックスの共著『社会主義—その成長および成果』では家族や共同体についての詳細な説明がなされたが、それはモルガンの古代社会の歴史研究をふまえての共同体論にほかならなかったし、その内容は〈共同体社会主義〉の主張そのものであった (pp.79-80)。

モリスと社会主義思想

◎モリス&バックス『社会主義』の第17章「ユートピア主義者：オーエン、サン・シモン、フーリエ」では、いわゆる空想的社会主義者と呼ばれた彼らを一定程度評価しつつ、基本的には「科学的社会主義」の視点から批判の対象と位置づけた。また、第18章「ユートピア社会主義から近代社会主義への移行」では、いわば二つの社会主義をつなぐ役割をはたしたのが、きわめて大きい影響力をもったプルードンだったと見ている (pp.80-83)。

⇒こうした理解は、欧米の社会主義思想の流れを、長い歴史をもち、無政府主義やキリスト教さらにユートピア思想など幅広いコンテクストにおいてとらえようという視点に由来する (p.83)。

👉(論点④)「モリスたちの社会主義の立場は、アメリカおよび東欧・ロシアなど後進地域に広がり始めた、国家社会主義への批判でした」(p.84)とまとめることは適切だろうか？

👉(論点⑤) エンゲルスが、モリスを「根深くもセンチメンタルな社会主義者」とみなし、「科学的社会主義者ではなくユートピア社会主義者」と厳しく批判した、(p.86) ことをいかにとらえるか？

モリスの『資本論』解説

明治期の日本において、『資本論』、マルクス、社会主義のいずれもモリスとともに移入されたことが特筆に値する。→ 1907年山川均が「大阪平民新聞」にモリスの『『資本論』解説』を連載。 (pp.89-90)

モリスの『資本論』解説の特徴 (1)

⇒エンゲルスの『空想より科学へ』(1880年刊)で主張された唯物史観の枠組みのなかで価値論・剰余価値論の法則を展開するのではなく、それから独立させて**純粋な資本主義経済の法則を理論的に説明**するという方法をとっている。(pp.91-92)。

👉(論点⑥)モリスが、「純粋資本主義」の資本家的生産方法を抽象し、そのいわば「細胞」としての商品を出発点として、資本主義経済の運動法則を価値論・剰余価値論と展開していく、と読み解く根拠はいささか弱い。(cf.pp.117-118)

モリスの『資本論』解説の特徴 (2)

⇒モリスは、商品形態として疎外されている労働力商品のいわばマイナスの効用というべき「労働の価値」を「人間の喜びの表現」としての労働へと質的な転換を試みたがゆえに、マルクスの**労働価値説**に立つ必然性があった。(p.95)

モリスの『資本論』解説の特徴 (3)

⇒モリスは、**資本**が商品や貨幣という流通形態をなす**価値の運動体**、価値増殖の運動体であることを把握していた。その視点が、職人・クラフツマンから芸術・アート的美しさを奪った商業主義のイデオロギーの批判につながった。しかも、価値の創造と価値の増殖の源泉となるのが**商品の形態をとる労働力(=「富を創造する機械」)**にほかならない点もつかんでいた。(pp.97-99)

モリスの『資本論』解説の特徴 (4)

⇒「富を創造する機械」としての**労働力商品の特殊性**の把握が、モリスに「労働は、負のマイナスの効用であり、単に生活のために働くだけ」という認識を通して、労働を「人類の精神的・肉体的能力のすべて」にふさわしい「喜び」に変える思想をもたらした(=疎外され、物化された労働の喜びや芸術への転換)。(pp.99-103)

モリスの『資本論』解説の特徴 (5)

⇒**資本家的生産様式**に対し、労働者の搾取、労働強化など労働条件の問題、機械化・合理化による失業増大などを批判しつつ、機械制大工業の下での資本による労働力の組織的統合、資本の金権支配を剔抉している。(pp.105-108)

モリスの『資本論』解説の特徴 (6)

⇒資本の蓄積過程よりも「**いわゆる本源的蓄積**」への強い関心。さらに、「所有法則転換」に対する新たな視点を提起。→資本家的生産様式に先行するのは、私的・個人的労働に基づく私的・個人的所有ではない。**村落的・ギルド的組織の労働であり、生産物もその所有**であって、そうした共同体の組織が前提になって、商品市場の流通取引も共同体と共同体の間に成立した。

真の科学的社会主義者モリス

⇒モリスは『社会主義』の第19章の表題を「科学的社会主義—カール・マルクス」と表現した。

👉 (論点⑦) モリスは、「マルクス主義を科学的社会主義、『資本論』を科学的社会主義の著作として評価し、それを忠実に解説した」(p.116)という説明の不適切性。ちなみに、p.159では「『資本論』の科学は、社会主義のイデオロギー的主張の書ではありません。社会主義のイデオロギーにより変革すべき対象、つまり純粋資本主義の運動法則が書かれ」ている旨の「適確な」指摘がある。